

〔曲目解題〕

なぜ私は聖書カンタータを作曲したか

天田 繁

1980年、学校法人東京キリスト教学園は、西東京の国立の地で、東京基督教短期大学における日本で初めてのプロテスタント教会音楽専攻コースを開講するに当たり、主任教授を拝命しその教育をスタートさせた。

1985年 <ルター、バッハの足跡を訪ねて>というツアーに参加し、教会音楽コースの5年間の教育成果を振り返りつつ、次なる第2期の5年を如何なる目標によって、この群れを牽引して発展に導くべきかを模索しての旅であった。

ツアーが、ライブツィッシの聖トマス教会を訪問した時、バッハによって教会カンタータが、この教会で毎週作曲され、その新曲が礼拝で演奏された現実の生々しさと、理解を超えた多忙と緊迫の仕事の全体像を概ね把握することが出来たのである。

これを、その時の私がどの程度理解していたか、ということもあるが、何よりも強烈に受けた印象が二つあって、それがその後の私の頭の中を毎日駆け回ることとなった。

一つ目は無尽蔵とともれるバッハの創造力の凄さである。さすがのバッハも契約社会の故に、可成りの苦勞と戦った跡が残っているが、それにしても、桁外れの創作力であることは、その歴史が証明しているところである。

そして二つ目は、礼拝で歌う聖歌隊の殆どが初見であったという、何とも空恐ろしい事実である。一つ目は、当時のバッハ自身の地位や実力からは、プロ中のプロであることを考えると、驚くには当たらないと言えるだろう。しかし、バッハの聖歌隊員となれば話は違うであろうし、聖歌隊員はもっといたものと思われやすいが、これまたきっかり12名

であったという。このメンバーは、全員が何でも歌えるプロ級のアマチュアと言うから恐れ入るではないか！この問題はごく最近になって、謎を解く重大なカギがあったことで納得した。

このバッハの指揮で、カンタータが歌われている状態をこう考えた。

ドイツ人が母国語のドイツ語でカンタータを歌う。ならば日本人が日本語でカンタータを歌う、となるには、一体何から手をつけたら良いのだろうか。

バッハも作詞が無くて困った時があったようだ。

そうこうするうちに私は、奉仕の出張先で役員宅に泊めてもらったのである。その家での夫人の立ち居振る舞いから、夫の両親、つまり義理の両親に仕える嫁としてのやさしさの、何と自然な真心かと、さながら地上の楽園と錯覚し「これは現代に生きるルツではないか」と、確信した。これはカンタータのルツ記を作曲せとの、神からのメッセージと受け止めた次第である。それではというので、詩人佐藤一枝先生と会うことにして、ルツ記から作曲したいこと、とにかくそれと同時にバッハのカンタータを互いに研究しようということになった。世界の音楽レベルの最高をいくドイツとは、あらゆる面で、日本のカンタータは、とくに教会で歌われるためには、そのスケール、人材、演奏技術等の面で余程の実用性が研究・工夫がなされない限り、歌われることはまず無理であろうとの予想を元に、詩人と何回も話し合った。

こうした作詞の研究だけで5年の年月が流れた。

いよいよ本番の作曲である。予め出演者を決めなければならない。話の中心ルツはソプラノ、ナオミは姑でアルトないしメゾ・ソプラノ、語りとボアズをテノール、そしてコーラスである。先ずコーラルを先に作曲した方が良いのではないかと思い、詩人にその作詞にとりかかってもらうことにした。

台本が出来上がってきても、バッハの研究は辞めるわけにはいかないので、そのまま続けたことと、最初はルツ記と決めたけど、次ぎなる第

2作のテーマはどこから書いてもらうか、そのヒントも絶えず釣り糸を垂れながら考えなければならず、三つの仕事を絶えず同時並行してコマを進ませていたことになる。結局、我が国で初のカンタータが完成するまで約10年を費やしたことになる。

(この作品は、作詞にも作曲にも当時の短期大学学長、樋口信平師著の注解書「ルツ記」(新約社出版)が、この曲にふさわしい価値ある内容の賛美が生み出されるために、極めて大きな役割を果たしたことを、感謝と共に付記しておこう。)

聖書カンタータ第1作「汝が神は我が神なり」ルツ記より

佐藤一枝作詞 天田 繁作曲 1995年作曲完成

歌 詞 「汝が神は我が神なり」(ルツ記 1:1~4:22)

合 唱 愛と慎みに満たされしルツの物語を、
いざ共に歌い、主をほめまつれ。
主なる神のみ名を賛えよ。

合 唱 さばきづかさの世、戦は後を絶たず、
畑は荒れ果て実りなし、
人は恐れて、国を捨つ、
ナオミと家族も、異邦のモアブへと、
ユダからのがれ来たりしが、
つれあいと二人の息子まで、
主がとられしは、如何なる御旨ぞ、
如何なる御旨なりしか。

テノール、語り ナオミの心は激しくゆれ、
主のもとに帰らんとこそ願う。
主が再びユダをかえりみ、
雨を降らせ地は喜びの声に、

満てるさまを聞けり、
遂に、ナオミは立ち上がり、
ルツとオルパ二人の嫁をともないて、
やもめ^{みたり}三人は旅立てり。

テノール、詠唱 夕日あたりをあかあかと染めて、
ナオミの心はいたく憂えり。

ナ オ ミ 汝が幸はいづくにありや、
母のもとにこそ汝が幸はあらん、
急ぎもどり、幸を得よ、
異邦の娘よ、育ちし村へと たち帰れや、
主はかならず汝を祝し給わん。

ル ツ われらは共に行き
ベツレヘムの民となりたし、
わが母よ、いかで汝のもとを離れん、
わが母よ、かくも愛しおるに。

ナ オ ミ そはわれも知りおり、
われもまた共に愛す、
愛する故にふたたび言わん、
異邦の娘よ、とく帰れや、
母のもとにこそ、安きを得よ、
ユダには汝の幸はあらじ、
見よ、
オルパはわがことばを聞きもどりゆけり、
ルツよ、相よめのあとを追うべし。

ル ツ われに帰れと言いたもうなかれ、
何事ありても、われはもどらじ、
われはともに住み、

汝が終わりの日を見てのち、
われも、その土に眠りたし、
わが母よ

いかで汝がもとを離れん、わが母よ。

1. そは汝が神こそ、
われもまた慕う神なれば、
汝が民は我が民ぞ
汝が神こそ我が神なり。

2. われ汝と住みて、
地の上を生きる我がつとめ、

ル ツ 汝が民は我が民ぞ
ナ オ ミ 汝が神こそ我が神なり。

ル ツ 3. 汝が最期を見て、
わが亡きがらをも汝がそばに

合 唱 汝が民は我が民ぞ
汝が神こそ我が神なり。

テノール、詠唱 大麦刈りのはじめ、ナオミとルツは、
エフラタ・ベツレヘムの町にたどりつきぬ、
人々のささやく声にも耳をかさず、
ルツはひたすら働きぬ、
やもめにとりて落穂こそ、
主よりたまわる恵みなれば、
片時も休まず拾い集めぬ。
やがて、ルツは
ボアズの畑に来たりて、
大いなる恵みに浴しぬ。
主のみ手が昼も夜もルツをおおえば、

異邦の娘は、贖われたり。
合 唱 あがない主よ、愛の主よ
異邦の娘は、主の家系に輝きて、
ダビデの裔に救い主は、
人となりて生まれたまいぬ。
ああ、くすしき神のみ業なり、
ルツの気高さを永久に伝えよ、
永久に賛えよ。

- コラール
1. そは汝が神こそ、
われもまた慕う神なれば、
汝が民は我が民ぞ、
汝が神こそ我が神なり。
 2. われ汝と住みて、
地の上を生きる我がつとめ。
汝が民は我が民ぞ、
汝が神こそ我が神なり。
 3. 汝が最期を看て、
わが亡きがらをも汝がそばに、
汝が民は我が民ぞ、
汝が神こそ我が神なり。

*

*

*

63歳の定年（2001年3月）で、たまたまだが学園勤務の最後と20世紀の終りが重なる結果となった。そんなこんなで、私としては何としても記念の音楽、出来れば、私の代表作の一つにしたいと、佐藤先生にも伝えていたのである。

第1作のルツ記は、完成した時から音楽科の諸君に、まるでテキストのように歌われて、幸運なスタートを切った、しかし、第2作の作曲に

とりかかった私にとっては、次の作曲の方が忙しかった。大切な定年を間違わないようにと、この年まで作曲することが許された感謝がいっぱい詰まった音楽を、主に捧げたいとの願いが、沸々と湧いてきた。

ルツ記はルツの献身を誓う感動物語だが、第2作は全く違って、若い娘が一国の運命に、自らの命をかけて戦う極めて高い緊張感がクライマックスとなるが、さて、それがどこまで表現出来るか誰にも分からないのである。スケッチの下書きをいったい何枚書いただろうか。

祈りつつ慎重に準備を進めて、いざ作曲開始となった。

書いては消し、消しては直す作業は果てしなく続くように思えたが、そんな中でも、ささやかな小さな手応えを覚えた時は、何よりの励ましに感じられ、仕事の終りは、作曲を生業とするように導かれた主の前に、作曲ノートを静かに閉じ、心からの感謝の祈りを捧げる日が続いた。

エステルの上プラノと拮抗する1本のヴァイオリン、エステルとその養い親、モルデカイの息詰るような二重唱、緊迫感の高いドラマと、裁きのあとに訪れる、ユダヤの平和を大らかに合唱する勝利の絵巻歌は、遂に30分かかる作品となって完成を見た。

聖書カンタータ第2作「死ぬべくば我死ぬべし」エステル記より (選ばれし者、エステル) 佐藤一枝作詞 天田 繫作曲

混声合唱 「栄光の山にのぼれ、険しき道も主がともにいますとき

人の心の及ばぬ恵み、目の前にひらかれん」

女声合唱 かくされし 神のはかりごとは、エステルの身にあらわされたり。

真白き花よ、ミルトスよ、夜明けの星の姿をうつす 気高き

花よ、

遠い昔のその香りは、いまに語りつがれり。

語 り スサの都は王の宴に 夜ごと酔いしれ、百と八十日を越し新

たな王妃^{きさき}を選ぶ布令^{よれ}諸々の国に告げ示されたり。

ここにふた親を失い、ユダヤの民なる乙女あり。
その名はハダサ、同じやからのモルデカイは、
うるわしき乙女ハダサを信仰もて養い育てたり。
心ならずもハダサはペルシャの王、アハシュエロスの目に止
まり、
王妃^{きさき}に選ばれたり。
王は、気高きハダサ・エステルを召し、すべての者にまさりて
愛せり。

時に、ユダヤの民に大いなるころみよせきたる。

ハ マ ン 「王よ。国のうちに、王のいいつけに従わず、己が神の他は拜
まぬ散らされし民あり。王の命を持て、すみやかに滅ぼされ
んことを」

王 「その民を汝に与えん。汝が思うままになせ」

語 り かくて、ユダヤの民をうち殺す布令^{よれ}はすみずみにまで及べり。
モルデカイは、荒布をまとい、灰をかぶりて王の門に立ちて
叫び、

モルデカイ 「神よ。我が声を聞き給いて、かえり見給わんことを、
ああ、我は切に請い願う。ああ、我は切に請い願う」

語 り エステルは養い親の叫びを耳にし、使いを走らせり。

モルデカイ 「早や、王は聞きし給うか。ここに文^{ふみ}の写しあり。
王の前に我が願いを伝えよ。この日のために、エステルは王
の宮に
入りしならずや。かくされし神のはかりごとに、汝れ黙しお
らば、

わが民は、ことごとく滅びなん」

エステル 「我はなにごとありても、今や、覚悟したれば、
我、もし死ぬべくば死ぬべし。我 もし死ぬべくば死ぬべし。
と」

コラール (一節)「選ばれし者 エステルは、ひたすら求む 主のみむ
ねを」

王妃きさきの道にかくされし、己が使命を果たさんために。

(二節) 祈りの内にさやかなる み声聞こゆる くしき愛よ
死ぬべくば 我死ぬべしと ささげつくして仰ぎまつらん。

語 り 断食ののち、エステルは王の内庭うちにおに進み行けり。

王はエステルおもの面もちに目を止め、恵みを示せり。

アハシュエロスまこと いさおはモルデカイの誠と功を調べて

思いかえし、エステルおものまじりなき愛に心打たれぬ。

エステルは王のために宴うたげを開きハマンも集えり。

二日目、主に押し込まれ、エステルは、宴のなかばに王に答
えぬ。

エステル 「王よ、知らずや、わが民を わが民を滅ぼさんとの文は、
国の隅々までまかれしを、われらが命をねらう者あり 王よ
われらを救い給え わが願いを聞いて わが民ユダヤ人を救
い給え

救い給え 王よ」 エステル 「ああ、我は切に乞い願う、我
は切に乞い願う ああ」

モルデカイ 「ああ、我は切に乞い願う、我は切に乞い願う ああ」 二重
唱

王 「エステルよ、エステルよ、かくもむごきたくらみ、我は聞く
にしのびぬ。

そは誰れぞや、そはいずこにあらん。エステルよ。」

エステル 「わが民を 迫害せし者、その敵 その敵こそ ここにおる
この 悪しきハマシ ハマシなり……！」

語 り ハマシは打ちふるえ、エステルにいのち請いをなせり
うろたえるハマシに、神のさばきは遂に来れり。
ハマシはおのがつくりし木に掛けられたり。
散らされしユダヤの民らは、光を見てよろこびぬ。
悲しみは歌と変わり、喪の日は祝いの日となれり、
ユダヤの民は食を共にし、分かち合い、
その日を覚えてプリムとなせり。

合 唱 「平和と、まことのことばは代々に伝わり、共にいます神の恵
みは讃えられん。かぐわしき香り、ミルトスの花よ、星の姿
をうつす花、エステル」 エステル 「我、もし死ぬべくば、死
ぬべし。我、もし死ぬべくば、死ぬべし。と」

コラール (一節) 「選ばれし者 エステルは、ひたすらもとむ 主のみ
むねを」
王妃の道にかくされし、己が使命を果たさんために。
(二節) 祈りのうちに さやかなる み声聞こゆる くしき
愛よ
死ぬべくば われ死ぬべしと、捧げ尽くして 仰ぎ
まつらん
(三節) 恵みに富める 主なる神 先立ち給う 悪の前に
如何でか恐れん 我は安し かちどきあげて 進み
に進まん
(四節) 栄えの君は 今も永久も 委ねる者に 近くまして
親しく来よと 語り給う 内なる宮に 住わせ給え。

(改訂) 2000年5月25日

*

*

*

約3年の月日をかけて定年退職を記念して、神に心からの感謝を新しい歌で捧げて、何回か舞台上に乗せることが出来たラッキーな年であった。その頃一寸珍しい話が聞こえてきた。普通の人とは目のつけどころの違う、理事長先生の故障のオルガンの話である。何でも、どこか遠い所の古道具屋で故障のオルガンをじっと見つめ、買うか買わないか、その場で腕組みし考え込んでしまったと言われる。店の主人と二言三言話してみたら、そのオルガンはアメリカ製のものらしいと言う。

遠く南北戦争時代にこの楽器は用いられたようである、はげたプレートの数字から類推して解ったのはどうやらこの辺までで、その後のことは誰にもトンと分からないと言う。

これを古物商に持ち込んだ人、それを迷った挙げ句買い、自宅まで運び込んだ理事長先生。「ちょっと見せたいものがある。」「修理したら使えるか？修理する価値があるか？」私は直せる、息を吹き返して蘇ると信じることを告げたら、大いに喜ばれて、早速専門業者の手に委ねられ、見事に蘇って、それもいい音がするではないか。そのときわたしは、カンタータ第3作クリスマス・カンタータを書き始める所だったので、初演はこのオルガンを使わせて欲しいとお願いした、本番はオルガン専門の宇内先生によって見事に弾いていただいた

王の王であるイエス様の生まれた、貧しい馬小屋の素朴な味わいを考えると、このオルガンが全くよく合った音で、作品に付加価値を与えてくれた。目のつけどころが違うと思っていた理事長先生の目が、1年経たないうちに立派に証明されたわけである。

このオルガン、米国から日本に流れてきて、目先の効く人に出会ったお陰で、もうひと花咲かせたことになる。

日本のクリスマスも、そう違ったプログラムで過ごすことはないよう
だ。あちこちでバッハのカンタータをもじって聖書カンタータをと思い、
オリジナルの日本語でのカンタータの定着をめざして、新しい歌を主に
捧げてもらいたい。み使いが沢山出てくるが、いかようにもなるので、
工夫をして欲しい。

聖書カンタータ 第3作 クリスマス・カンタータ
ルカ伝より 佐藤一枝作詞 天田 繁作曲
「その名はインマヌエル」

男声合唱 おごそかに 神の霊
イザヤに のぞみて 語りたもう。

バス・ソロ (神の霊) 「ダヴィデのすえなる一つの若枝
株よりはえ出で 実を結ばん
その名はインマヌエル『神 われと共にいます』

合 唱 時みちて 闇の時代を 切り裂く如く
言葉は肉体をとり 世にあらわれたり。
涙は涙に終わらず 光はすみずみに及べり。

男声合唱 み使いマリアに語りたもう。

女声合唱 (み使い) 「神より恵みを 与えられし
乙女 マリヤやおそるるなかれ
うまれいつる みどりごをイエスと名づけよ
彼はいと高き者の子と となえられん」

ソプラノ・ソロ わがたましいは 主をあがめ
救い主なる神をたたえまつらん。
いやしきわれさえ みこころにとめ 大いなるみわざ
をあらわしたもう。

世の人われを 幸なるかな、汝れこそ
主のことばを 宿しし者と言わん
ああ いとも くすしきかな、
アブラハムとその民に 語られしことば
この身に 成る日の 近しとは！

朗 読

その頃全世界に 皇帝アウグストより勅令が出され、
登録のために 人々は己の町にと急ぎ戻れり。
ヨセフも身重になったいいなずけ マリヤと共に
ナザレを出で、ベツレヘムの町に上り行きぬ。合唱
「マリヤをいたわる ヨセフ、
宿をさがせど ゆとりなし、
光が 来たらんとする折しも
『世は 彼を 知らざりき』

朗 読

この地方にて 羊の番をし 野宿せる
羊飼いらに、み使い 現れぬ
主の栄光 辺りをめぐり照らし
羊飼いらは 恐れとまどう。

女声合唱 (み使い)

「恐れるな、大いなる喜びを 伝えん。
今日、ダヴィデの町に 救い主生まれたもう。
布にくるまれ、飼い葉桶に眠るみどりごこそ
その印なり」

朗 読

たちまち あまたの天の軍勢 空にあらわれ
み使いと共に神を賛美せり。

女声合唱 (み使い)

「いと高きところには 栄光 神にあれ
地に平和 主の よろこびたもう 人にあれ」

朗 読

羊飼いら、み使いのことばを心にとどめ
家畜小屋に みどりごイエスを尋ね宛てたり。

男声合唱 「この方こそ われらに いま与えられし 救い主なるかな」

合唱 「この方こそ われらに いま与えられし 救い主なるかな」

二重唱(マリヤ・ヨセフ) 「羊飼いら 心おどらせあいらしき御子をおがみぬ。
マリヤは、ヨセフと、 神のくしきみわぎを ほめたとう。

羊飼いら、ともによろこび 野に帰り行けり

合唱(マリヤ・ヨセフ) 「羊飼いら ころおどらせあいらしき 御子をおがみぬ

マリヤはヨセフと、神のくしき みわぎを ほめたとう。

羊飼いら ともによろこび 野に帰り行けり」

*

*

*

私が国立の地で、細々ながらも音楽活動をおし進めてきたものの中の二本の柱は、「メサイア」と木声会の演奏活動がある。前者はクワイアのクラス授業の発表機関として、総決算をクリスマス・コンサートをピークに、エネルギーを投入する神学生らしい年間サイクルと合致した。心も体も、学生たちの生活が安定しつつ確立していったし、学生の音楽力も自然に高められていった。この間の私の指導での大きな発見は、合唱を教えることが、如何に楽しい仕事であるかということであった。音楽専攻生が神学専攻生の音取りを忍耐強くつき合うことで、互いの賜物を認め合うという信頼関係や、本番直前からクワイアOBが応援にかけつけるなど、共に賛美をした者の絆の強さは、多くの人の知る所となっている。

後者の木声会は、クワイアを終えて、更に歌いたい人たちの集まりで、ミサ曲や新曲カンタータ（ルツ記、エステル記、クリスマス）を休まず

歌い続けてきたのである。

クリスマス・カンタータが03年に仕上がって「さて次は？」と考えていたら、佐藤先生が「これからの人生を歩まれる学生さんの前途を祝して是非『結婚カンタータ』を

書きましょう！」と言って下さり、この鶴の一声で決まった。改めて記録を確認すると2005年7月となっている。やはり2年位はかかったようである。

聖書カンタータ第4作 結婚カンタータ

佐藤一枝作詞 天田 繁作曲「祝しませ愛のみ神よ」

1. (序曲) コラール

2. (混声合唱)

恵みに溢れる 祝いのむしろで
父なる神の み前に立ちて
妹背のちぎりを 交わす二人を
主はいまみ手もて 祝したまえり
たたえよ 救いの君を
あがめよ 永遠とこにます主を

3. 新郎(バリトン・ソロ)

主はわれに たからに勝る
よき助け人を 与えませり
感謝せん わが神よ
主の奇しき 恵みに
われはこたえまつらん

4. 新婦(メゾソプラノ・ソロ)

いまよりのち 喜びも悲しみも
分かち合いつ
たがいに 愛をはぐくみ
霊に燃え、主に仕え、日々祈り
主に従わん

5. 新郎・新婦（二重唱） 世の旅路を 共に歩み行かば
 主のいつくしみは
 絶ゆることなし
6. アリア（バリトン・ソロ） 門よ（かど）よ、こうべを上げよ
 とこしえの戸よ あがれ
 栄光の王が 入られる
 この栄光の王は だれか
 万軍の主 これこそ 栄光の王なり。
 （詩篇 24:9～10）
7. 女声合唱 あでやかさは いつわりなり
 うつくしきは つかのまなり
 ただ主を
 おそれかしこむ女こそ
 ほめたたえられん （箴言 31:30）
8. 男声合唱 全能者の蔭に やどる人は
 主に言わん
 「主はわが避けどころ
 わが城なり、
 わが より頼む神なり」と。（詩篇 91:1～2）
9. 四重唱 神の合わせたまいし この二人
 離すことあたわじ 何人も
 弱きところは 助けおぎない
 病める時も すこやかなる時も
 よく語り合い よく聞き合いつつ
 主に 喜ばれる者となりたし （マタイ 19:6）
10. 混声合唱 いかなる恵み いかなる幸よ
 「百合の花の園にて 群れを彼はみちびく」

「信仰・希望・愛、これらのうちでと
愛ほど大いなるものはなし」。

(雅歌 6:3、第 I コリント 13:13)

11. コラール (会衆と共に)

- 1) ほめたたえよ 栄えある主を
しげき恵みは 河のごとくに
流れゆき 野にも畠にも
よろこびの 声はひびけり
声はひびけり
- 2) 歌 歌いつ み座の前にて
とわに変わらぬ 誓いあらたに
結ばるる きよき二人を
祝しませ 愛のみ神よ
愛のみ神よ
- 3) ほめたたえよ 栄えある主を
われら集いて 祝うむしろで
み声聞き ころろはずみて
わしのごと 空に駆け行く
空に駆け行く
アーメン

(イザヤ 40:31)

(2005年7月脱稿)

*

*

*

結婚カンタータを作曲した後は、どちらからともなく自然に〈お葬式
カンタータ〉と考えていたようであった。それは、詩篇 23 篇に対する
ちょっとした慎重さがあって、この詩篇作曲を巡って、忘れられない会
話をしたことがあったからである。誰もが殆ど暗誦しているし、若し人

気投票でもしたら、恐らく断トツ一位間違いなしのこんなポピュラーな詩篇 23 篇を発表するならば、それなりの深い味わい、幾多の困難を乗り越えた人生の悟りを知った赦しのゆとりを、それこそ、悠々と歌える歌でありたいものと、言わば時間をかけて、大切に温めて来た、とっておきのテーマであったという方がピンと来るだろうか。

私にとってのこの 23 篇は、告別カンタータの代表であり祈りの象徴として存在しよう。臨時記号が急激に現れる所などは、常に厳しい評価に耐えているが半音階的ではあっても、決して半音階和声ではなく、あくまで機能 and 声理論の内側で処理されている。

シシリアーノのリズムを急がずに、ダビデの豎琴を弾く気持を彷彿とさせて欲しい。終曲の最期は、自分がいよいよまぶたを閉じ、音を立てずにこのように静かに世を去るのだろうと臨終直前の、まるでリハーサル気分であった。

聖書カンタータ 第 5 作 告別カンタータ 佐藤一枝作詞 天田 繁作曲「主の宮に住わん」

1 この世の旅路 (混声合唱)

- 1) この世の旅路 走り終えて
愛する者は 先に帰り行きぬ
み国の門に 御使いたちの
待ち侘ぶ歌は ひびきわたれり
- 2) 労苦を解かれ 憂いも消えて
あがない主を まじかくに拝す
その喜びは とこしえまでも
したわしき主の 宮に住わん

2 すべての事に (男声合唱)

すべての事に 時があり
産まるるに 時があり
死ぬるにも 時があり
神のわざは 時にかないて いとうるわし

(伝道者の書 3:1、2、11)

3 主の約束は (バリトン朗読とレチタティボ)

主の約束は まことなり (朗読)

「終わりまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

主はその魂を引き上げて

天なる休場に入れたもうなり

(マタイ 24:13)

4 されど主よ (女声合唱)

然れど主よ 残りし者の 痛み悲しみ

憐れみもて 覚えたまえ

再び逢う日の 来たるまで

力と望みを 日々たまいて

知恵の心を 得させたまえや

5 主はわが飼い主 (ソプラノ独唱)

主はわが飼い主 われは牧の羊

主はわれを青き野辺に伏させ

いこいの水際に伴いたもう

たとえ死の蔭の谷を行くとも

主、共にいませば 恐れはなし

君が手に持つ むちと杖は

わがたましいの 慰めなり

生くる限りは 汝がいつくしみ

われにともない来るべし

われは とこしえに 主の宮に住まわん

(詩篇 23 篇)

- 6 見ゆるものではなく (バリトン朗読とレチタティボ)
見ゆものではなく
見えぬものにわれ目を注ぐ (朗読)
見えぬものは とこしえに続くなり (第IIコリント 4:18)

- 7 神を恐れ (混声合唱) 神を恐れ 人を恐れず
ひたすら 主に従いし
聖徒らは みふみに記されたり
そのわざは 死して後も
今なお忘らるることなし

- 8 ヨブは苦難の (バリトン独唱)
ヨブは苦難の僕なりしが
耐え忍び ちり灰の中で悔い
「われ、主を耳にて聞きおりしが
今は目をもて 拝しまつる」
神、ヨブの碎けし たましいを
そのきよき祈りを 受け入れたまいて
祝福を倍にして かえりみたもう
まことに神は善にして 善をなしたもうなり
(ヨブ記 42:5~6、詩篇 119:68)

- 9 見よ、古き天と地は (バリトン朗読)
「見よ、古き天と地は 消えうせぬ。
新しき都は、神のもとより出で来る」 (朗読)
(ヨハネ黙示録 21:1~2)

- 10 われはアルファなりオメガなり (混声合唱、バリトン、ソプラノ)
「われはアルファなり、オメガなり、初めなり、終わりなり、
かわける者には、いのちの泉より 価なしに飲ません」と声す

なり

もはや涙はぬぐい取られ 死もなく 悲しみも、叫びも、痛みもなし

先のは 過ぎ去ればなり」 (ヨハネ黙示録 21:3～6)

11 主の宮に住まわん (コラール混声合唱曲)

- 1) なぐさめ主よ、今きたりて
われらと共に おらせたまえや
わが愛する者は 先に帰り行きぬ
悲しみうれいのなき み国へと
- 2) こころみ多き 世の旅路も
主、共にませば ひとときなりし
かぐわしき花の香 小鳥の音を聞けば
さながらみ国に われは憩えり
- 3) ものごとすべて 良き道へと
引き寄せたもう 愛のみ神よ
われもみもとに行き み顔仰ぎまつり
よろこびて歌う 日はまちかならん

*

*

*

第6作復活・昇天カンタータは、ヨハネの福音書20章が舞台の中心となっており、十字架の上で完成された救いの道を現わしている。

イエスが十字架につけられた場所に園があって、そこには、まだ誰も葬られたことのない新しい墓があった。

その日がユダヤ人の備え日であったのと、墓が近かったので、彼らはイエスをそこに納めた。(ヨハネ 19:41～42) このドラマは次の20章で、マグダラのマリヤは、イエスの頭に巻かれていた布切れは一緒にではなく、離れたところに置かれたままになっているのを見たが、中へは入らなかった。(ヨハネ 20:5)

そしてやがて復活の主にお会いする。

「平安があなたがたにあるように」という有名なイエスの言葉に出会う。

「弟子たちは主を見て喜んだ」。これがタイトルとなった。この曲は一貫して対話体形式を取り、見方によっては、上品なオペラの一遍ともなりうる可能性を秘めているようにも思える。

もう一つ、この第6作は、最後のコーラルに「天地たたえよ」をもって来たことである。大抵は会衆と一緒に歌える歌を作曲するのが通例であるが、この案は、最初から作詞者の発想として主に導かれたようだ。というのは、「天地たたえよ」は合唱の楽しさと醍醐味を、是非味わってほしいとの願いで1995年に作曲された曲であるから。天と地にある、ありとあらゆる楽器で、全員が主を賛美したならどんなにすばらしい事だろうか。

第6作 復活・昇天カンタータ「弟子たち主を見て喜べり」

作 詞 佐藤一枝 作 曲 天田 繁

1. 序 曲

2. 混声合唱

十字架の上で「事終わりぬ」とイエスは救いを成し遂
げたもう

死にて葬られ黄泉にくだりて 三日目に よみがえ
りし

イエス・キリストこそ あがないぬし 生ける神な
り

3. 朗 読

ひとまわり
一週ひとまわりの初めの日、夜明け前に

マグダラのマリヤ 香油をたずさえ

イエスの葬られし墓へと 急ぎ行けり

東の空 ほのかに白^{しろ}みそめし頃 墓に着きたるに
封印されし墓石は 既にのけられ イエスの亡きが
らは見当たらず
墓^{から}は空なり (ヨハネ 20:1)

4. テノール叙唱 マグダラのマリヤ 騒ぐ心を抑えつつ
ペテロとヨハネの もとに行き (ヨハネ 20:2)

マリヤ詠唱 「たれか 主を墓より 取り去れり
何^{いづこ}処に置きしか われは知らず」

5. 朗 読 ペテロとヨハネを伴いて マリヤ 墓へともどりた
る (ヨハネ 20:4)

6. テノール叙唱 先に着きしヨハネ 身をかがめて墓の中をうかがえ
ど
主の亡きがらは そこになし ペテロ つづいて墓
に着き
中に入りしが 亜麻布しか見当たらず
(ヨハネ 20:6)

イエスの頭に巻かれし布は 離れし所に置かれたり
(ヨハネ 20:7)

7. テノール叙唱 むなしく さとりえず ふたりは 去れり
(ヨハネ 20:9)

8. テノール叙唱 朝もや あたりに立ちこめ 静かに陽は昇り来る
(ヨハネ 20:11)

マリヤ ひとり イエスの墓の前にて 泣きくずれ
おるに

イエス詠唱 「なにゆえ 汝れは泣きむせびおるや」
(ヨハネ 20:13)

朗 読 細き声もて 問う者あれば 園^{そのもり}守^{もり}と思いて

- マリヤ答う (ヨハネ 20:15)
- マリヤ詠唱 「いずこに わが主を 持ち去りしか 教えませ
われ引き取るべし」
9. 朗 読 その時 さやかに聞こゆ 親しき 主イエスの み
声
- テノール イエス 「マリヤよ」
10. 朗読 (1) マリヤ おどろき 振り返りて
- アルト マリヤ 「ラボニ」 (ヨハネ 20:16)
- 朗読 (2) すがりつかんとするマリヤを イエスは制し
- イエス詠唱 「わが兄弟たちに いそぎ告げよ (ヨハネ 20:17)
- われはわが父 また 汝れの父なる
- わが神 汝れの神なる方のもとに 上りゆかん」
- 朗読 (3) マリヤ ただちに走りゆきて 伝えたり弟子たちに よみが
えりの 主イエスのことばを
- マリヤ詠唱 「われは 主を 見たり まこと
われは よみがえりの主を 見たり」
- (ヨハネ 20:18)
11. 朗読 弟子たち ひとまにて 肩を寄せ合い 畏れおる時よみがえり
の主は 音もなく 彼らのなかに
- 現れたもう 彼らのま中に イエス立ちて
- (ヨハネ 20:19)
- イエス詠唱 「平安 汝れに在れ 平安 汝れに在れ」
- (ヨハネ 20:20)
12. 朗 読 弟子たち 主を見て 喜べり
13. 混声合唱 大いなる 大いなる 喜び 弟子らの心に わき出
ず
- 主が常々 語られし ことども 思い起こし

- 今や よみがえりを 悟るに至れり
14. 朗 読 主は そののち 40日に亘り 神の国につき みず
からの
生ける証しを 示し給いぬ (使徒 1:3)
15. イエス詠唱 「聖霊 汝れの上に ^{のぞ}臨むとき 汝れは力を受け
るべし
地の果てまでも 我があかし人となりぬ (使徒 1:8)
- 朗 読 語り終えし主イエスは 弟子らの目の前より 天に
上げられ
雲に迎えられ そのみ姿は まもなく見えなくなりぬ
(使徒 1:9)
16. 朗 読 主の昇り行くとき 白き衣を着たる天の使い
(使徒 1:11)
- かたわらに 立ちて 語りぬ
- 二重唱 「天に昇りし イエス・キリストは 見たる如くに
再び来り給わん」
17. 混声合唱 キリスト・イエスは眠りし者の 初穂なり
(第Iコリント 15:20)
- 死をこぼち 死に勝ちませる 生ける神なり
18. 間奏曲
19. コラール 天地たたえよ

1) 天地たたえよ もろびと歌え

主イエスは墓より よみがえりたもう
(おりかえし) ハレルヤ ハレルヤ 死に勝ちませる
ハレルヤ ハレルヤ 主こそ神なれ

2) よみにも くだりて あがないたもう
愛こそ栄えの み姿なれや
(おりかえし)

3) “やすかれ”のたもう よみがえりの主
見ずして 信ずる
者としたまえ
(おりかえし)

4) わが目もひらかれ 心のうちに
日ごとに生ける主 たたえて仰ぐ
(おりかえし)

ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
アーメン アーメン アーメン
ハレルヤ

(2011年2月18日(金)初演 所用時間約23分)
東京キリスト教学園2010年度卒業記念コンサートにて

*

*

*

オリジナル日本語聖書カンタータは、その出発点から原則母語主義を貫いてきた。これは何でもないように思えるが、実はこの決定は軽いものではなく、むしろその決定のバックとなっている、歴史的理、音楽的背景や、カンタータという曲がいかにして教会と社会に貢献することができるのかという社会的意義についても、考えなければならないだろう。その点では聖書と言う唯一の歴史観にたつ原点を大切にしながら、整えて頂いた歌詞に、音楽という着物を着せて一連の7曲の作品を生み出してきた。

ところが、この最後の作品に限ってであるが、これまでとは違った手法に立っている。

例えば、ヘンデルのメサイア作曲の場合、友人のジェネズは、欽定訳聖書から抜き書きしてそれをまとめたもので、必ずしも聖書の引照通りではない、とされているように、この時代から、若干の自由も与えられていた事を、我々も考え合わせる事が出来よう。

従って、詩人の発想と聖句の連結は、必ずしも常識的レベルと一致するものではない、因に、この作品の初めに出てくる3カ所の聖句における関連性はどうか。

しかし、音楽と共に聞いた場合では、明らかに効果が違って来て、違和感を感じさせない。

こういう理由のもとに、詩人の発想の豊かさを守るために、あえて詩と音楽を分離させないで考察する習慣をつけたいと思ったからである。詩人の瑞々しい感性にあやかりつつ、共に成長したいものと願う日々である。

日本語オリジナル第7作 献身・派遣カンタータ

佐藤一枝 作詞 天田 繁 作曲

「十字架の上よりさし来る光」

1 序 曲

2 十字架の上より (混声四部合唱) (第Iペテロ 2:9)

十字架の上より さし来る光 わが魂を あらたにし

神のもの(所有)と なしたまえば

「捧ぐるこの身を 受け入れたまえや」

十字架を仰ぎて 主に祈らん

3 生ける主 (男声ソロ アリア) (ヨハネ 21:22)

生ける主 救い主なる イエス・キリスト

われらに 力づよき み声もて かく 語りたもう

「なんじは 我に したがえ」

- 4 汝が身は (朗読①) 汝が身は 神より受けし 聖霊の宮なり
キリスト・イエスの血潮により あがなわれたる ものならば
おの己が身をもて 神の栄光を 現すべし
- 5 主の愛 (男声 アリア) 主の愛 我が心に 満ち溢れ
沸き上がる感謝 み前に ただ ひれ伏すのみ
「用いたまえ この弱き われを」
- 6 涙とともに (女声三部合唱) (詩篇 126:5)
涙とともに 種まく者は 豊かな実りを 与えられ
喜びの声をあげて 刈るを得ん
- 7 刈り入れの束を (朗読②) (マタイ 25:21)
刈り入れの束を 手に携えて 帰り来る 働き人よ 主は言われる
「良き僕よ 汝が我に なせしわざは わずかものにも
忠実なりしゆえ、
多くのものを つかさどらせん 共によるこび 分かち合わん」
- 8 ああ力強き 主の御手よ (男女二部合唱→混声四部)
(エペソ 5:10)
ああ、 力強き 主の御手よ われを離さず とらえたもう
みこころ、み旨を今悟りぬ み神は 従う者を 待ちわびて
「神の喜び求むるおのを わきまえ 知るべし」と
やさしく語りかけたもう
- 9 焼けつく原も (男声合唱)
焼けつく原も、 凍てつく地でも
“行け”と言わるる 地をばめざして
いずこへなりとも われは行かん われは行かん
- 10 み言葉とりて (ソプラノ ソロ) (マタイ 28:10)

みことばとりて 主の愛伝うる 足となりたし
「恐れるな 行きて 兄弟たちに ガリラヤに行き、
かしこにて われを見るべきことを知らせよ」と 語りし 主は
われにも 御声もて 導き給う と 信ずるなり

11 世々の聖徒のたどりし道は (朗読③)

世々の聖徒の たどりし道は ころみ、そしり、かずつあれど
キリストみづから これらを受けて 彼等の先がけと なり給えば
などで恐るる ことはあらず

12 視よ 今は恵みのとき (女声二重唱) (第Ⅱコリント 6:2)

視よ 今は恵みのとき 視よ 今は救いの日なり
父なる神の 聖なる招きは 永遠とわのいのちの 恵みならば
日毎、夜毎に 御名をたたえ 声を限りに ほめ歌 歌わん

13 われらは主の民 (女声・男声・混声四部合唱)

女声 われらは主の民なり 証し人なる今は 声高く
御名をほめん

男声 重い罪の縄目を 解き放たれし今は 御霊 内に宿るなり

混声 われらは主イエスのもの 主イエスは我がものとし
潔き御霊に導かれつつ はてるあてなき世の闘いも
今しばしなり

再び主イエスに まみゆる 日こそ

ただ一つの のぞみ希望よ ただ一つの のぞみ希望なり

14 間奏曲

15 十字架の上にて 終曲 (コラール)

1) 十字架の上にて 血潮を流し

み声に背を向け さ迷うわれを

死をもてあがなう 主イエスの愛よ

よろこび安きを 日毎に給え

2) 栄えのいのちに よみがえりし主

わが身もハレルヤ 生きる恵みに

導く主の手に すべてをゆだね

地の果てなりとも 従い行けり

3) 幸いつきじと 約束なせる

真理のみたまは いかなるおりも

正しき道へと 伴いたもう

世になき幸こそ キリストの愛